

## 下総・庄内領（野田市）に見る大杉信仰の繁栄

石田年子

### はじめに

茨城県稻敷市阿波に鎮座し、通称「アンバ様」で知られる阿波本宮大杉神社（以後、本宮大杉神社）は、奈良時代から永い歴史を紡ぐ神社である。近年は怪僧・常陸坊海尊が当社の社僧を務めていたとの伝説に因み、「日本第一・夢むすび大明神」と称するなど現代人の願いに沿つた利益を謳う神社へと変容しているが、本来は航行守護と疫病（疱瘡）退散に靈験があり、利根川水系を中心として関東一円の船運関係者に篤く信仰されてきた歴史がある。

本宮大杉神社の歴史については民俗学者・大島建彦氏の著書・『アンバ大杉信仰』をはじめ、研究者による多くの先行論文が発表されていることからこれに拠る事とし、本稿では船運が廃れてから一世紀余を経た現在でも大杉信仰の定着が突出している野田市の特異性に着目し、その痕跡と現状を報告する。

### 一、下総地方（房総）の大杉信仰

下総地方に大杉信仰が伝播するのは江戸中期からのことで、『大杉神社文書録・下之巻』「大杉殿今宮大明神目録」には「一、

宝永四年丁亥下野国從日光居傳此別當御支配に罷成彌々ふしぎ日夜に御座候間常陸下總あわ上総江戸等も不申及参詣福敷御座候別當不申及町方迄はんじう仕候」とあり、安穩寺（大杉神社別当）が日光東照宮別当・大樂院の傘下となる宝永四年（一七〇七）以降、江戸を含む関東一円から参詣者が増し、周辺の町も巻き込んだ繁栄が始まつたことを記している。同資料には「正徳元年大杉殿御宮及彌勒堂鉛立」ともあり、参詣者の増加により安穩寺境内に大杉大明神の拝殿などが整備されたことが判り、下総地方の人々の参詣が始まるのも宝永期からと推察される。

享保一〇年（一七二五）より疫病退散の神として常陸・下総一帯に大杉大明神が流行神の兆しを見せ始め、村人の大杉囃子の歌声と共に常陸国（茨城県）南部より下総・上総・安房へと「村次ぎ」の形で分霊の巡行が行われる。このような分霊の村次ぎは寺社が企てる一種のPR戦略とも言えるもので、出羽・湯殿権現が栎木・日光山に勧請された寛永元年（一六二四）にも、白い幣束で飾った竹の神輿にのった湯殿権現の分霊が村次ぎされ日光山に入り、後に爆発的な湯殿山ブームが興つてている。

## 1. 下総地方の大杉塔からの推察

下総地域の大杉信仰の動きを具体的に推察する手段の一つに、地域に残されている大杉塔を検討する方法がある。千葉県下（下総地域）における大杉塔は、管見による集計では一一七基を数えており、それらの造立数を年別に棒グラフとしたものを図1に示した。流行神として各地を巡回した享保期の後に小さな造立ブームが見られるが、圧倒的に江戸後期の文化文政期から幕末にかけての造立が多く、下総地域ではこの時期に船運関係者を中心とする大杉信仰が頂点を迎えたと思われる。

明治維新を迎えると、従来の船による輸送は転換期を迎えることから、鉄道が普及し始めると、従来の船による輸送は転換期を迎えることから、利根川水運も衰微して行くことになる。これにより船運関係者による大杉神社への信仰にも陰りが出てきたことがこのグラフからも見てとれる。

## 2. 下総の大杉塔

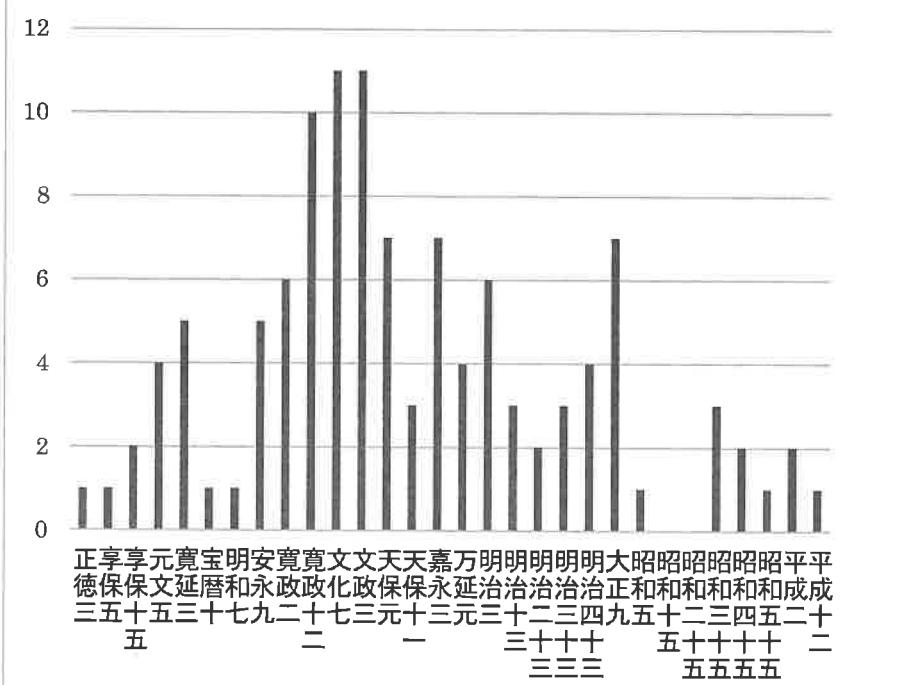
末表1に千葉県初期の大杉塔一〇基を上げた。初出の塔は、白井市平塚・鳥見神社の境内に建つ宝永六年（一七〇九）一一月造立の「大杉大明神」塔で、当神社の氏子・山澤金十郎という人物により建立されている。この神社は手賀沼沿岸に位置することから施主は手賀沼船運の関係者である可能性が高い。次いで正徳元年（一七一二）に我孫子市中峠の龍泉寺に清海行人により大杉塔が造立される。清海行人はその名前から湯殿山系の修驗と推察され、日光山とは繋がりが深い。この頃から日光山系修驗の間で大杉大明神の布教活動が始まっていた事が感じられる。三、四番は野田市の二基で、享保一一年はまさに大杉大明神が房総地方を村次ぎされている最中の造立である。

## 二、野田市の大杉信仰

野田市が平成七年より刊行している地区別の民俗調査報告

年代	造立数
正徳3	1
享保5	1
享保15	2
元文5	4
寛延3	5
宝曆10	1
明和7	1
安永9	5
寛政2	6
寛政12	10
文化7	11
文政3	11
天保元	7
天保11	3
嘉永3	7
万延元	4
明治3	6
明治13	3
明治23	2
明治33	3
明治43	4
大正9	7
昭和5	1
昭和15	0
昭和25	0
昭和35	3
昭和45	2
昭和55	1
平成2	2
平成12	1
	114

図1. 下総大杉塔年代別造立数



書は九冊を数える。この報告書に共通して記述されているもの一つに大杉神社関連の民俗行事があり、事例が非常に多い事に気づく。

大島建彦編著『アンバ大杉信仰』には、平成八年に本宮大杉神社へ参詣（代参）をした講の一覧表が掲載されており、千葉県では下総地方の二〇市町村・百六〇講の参詣があつたことが判る。その中で東葛地区は八市・百三一講と圧倒的に多く、特に野田市の講数は六六講と全体の四〇%を占める。

江戸中期より航行守護と疫病（主に疱瘡）退散の神として、利根川水系の船運関係者に篤く信仰されてきた大杉信仰であるが、利根川沿岸の旧河岸場周辺に信仰事例が多い中で、野田市においては今尚、市内全域に信仰が定着しており、大杉信仰の特異地域と云つても過言ではない。そのことに着目し、市内の大杉信仰に関する講・石塔・工芸品・文書などを中心に調査した結果を表3にまとめた。

### 1. 神輿を祀る大杉神社群

市内全域に七三カ所の大杉信仰に関わる神社・堂・石祠などが確認できた。五八社が各地区の鎮守神社の境内に祀られている大杉社で、「悪疫退散」の功力を同じくする八坂神社や須賀神社を除く全てといつても過言でない数である。社殿は簡素な神輿庫やシャッター付車庫風、御堂風と形式は様々であるが、中は一様に大杉祭りで担ぐ神輿が納められている。その殆どに「大杉殿」「大杉神社」等の扁額と注連縄や大鈴も飾られ、單なる神輿倉ではなく礼拝の対象となる大杉社である事が判る。他に単独の大杉神社にも同様に神輿が祀られており、これを合わせると六一社となる。

#### ・ 旧関宿藩領と庄内領との民俗の違い

この表で気付くことは、木間ヶ瀬地区に隣接する二川地区以北に大杉信仰の痕跡が薄いことである。古布内地区周辺にも昭

和末頃迄大杉講があつたとの証言があるが、鎮守神社に大杉社が祀られている地区は見当たらない。水関所があり河岸で栄えた関宿地区では江戸町周辺の稻荷神社に石塔や「アンバ稻荷」に大杉信仰の痕跡が残るが、地区全体の信仰ではなく、船頭集団による大杉講であつたとの証言を得ている。尚、近世に関宿藩領であつた地域と庄内領の地域とでは民間信仰や経済・文化圏が異なることは注意する必要がある。

### 2. 大杉祭と工芸品



東金野井地区の遠藤大治郎家文書の中に、明治一〇年七月一日付の大杉祭に関する届出・「例祭御届」が残されている。「一、今宮大杉大神 右先例年之通り本月廿七日惡魔除トシテ戸毎ニ輿札回シ太鼓打鳴シ翌廿八日入輿（以下略）」とあり、明治初期における大杉神社祭礼の有様を垣間見ることができる。大杉祭は惡魔祓を目的とし、大杉囃子の笛と太鼓を伴い神輿渡御と札配りで集落全戸を回る事を一日間で行なつていたようである。筆者の調査では、昭和期の祭りには地区間の競争心

とも相まって、地元民の大杉祭に対する熱の入れようが見えてくる。どの地区も趣向が凝らされ、神輿の渡御は大幣束を先頭に花万灯、高張提灯、御囃子、神輿とにぎやかな行列と共に天狗人形を乗せた山車や、お囃子連が乗る屋台なども用意され極めて華やかなもののようにあつた。神輿担ぎの若衆は各戸が用意した接待の酒に酔いしれ、ケンカなども起きたがそれも祭りの一興とされた。かつては七月半ばになると野田市全域で一斉にこの様な盛大な祭りが行なわれていたのである。

現在の野田市内の大杉祭で、昔は最も盛んであった河川沿岸の地区は、人口減少により神輿の渡御が困難となり、社殿前に飾るのみの地区も増えたが、新興住宅地を含む地域は新住民との交流の場として神輿渡御が盛んになつてゐる事例もあり様々である。規模は異なつても多くの地区が大杉社を維持しており、本宮大杉神社への代参や辻きりも継承されていることが確認出来た。このような経緯から、市内七三地区に残された大杉祭に纏わる神輿・神面・人形などの工芸品も多様であった。

### (1) 大杉神輿

大杉神社に関わる七三地区の中でも神輿を所蔵する神社は五八ヶ所にのぼり、子供神輿も加えると相当な数となる。戦後に新造や改修がなされ派手な形が大半であるが小型の古神輿も数多く、今上地区所蔵の船神輿なども含めて美術工芸品としての観点から調査の必要を感じる。

大杉信仰にとって神輿は重要な意味を持つ。享保一〇年に大杉大明神が疱瘡除けの神として流行った際、人々は大杉囃子と共に杉の葉で作った小さな神輿に分霊を移し、房総の村から村へ渡して回つたと伝えられる。又、当社の古名である「今宮大杉大明神」の今宮とは京都市紫野の今宮神社を意味し、当社で行われる大祭は、平安時代に疫病が大流行した折、疫神を二基の神輿に祭り込み派手な歌や踊りで悪疫(疱瘡)退散を祈つた紫野御靈会が起源とされている。

「祭りでもないのに村の男衆がウコン色の鉢巻とタスキをして神輿を担ぎ、田と云わず畠といわず走り回つていた。あれはなんだつたのだろうか」とよく母親が話していたとの証言をして神輿を担い、田と云はず畠といはず走り回つていた。あれは岡田地区から嫁いできた老婦人から得ている。これは岡田地区的今宮神社の氏子による疫病祓いの風景と考えられ、大杉神輿は村にひとたび疫病が流行れば、幼子の記憶に鮮烈に残るような迫力で村内を祓つて回つていたのである。

### (2) 船神輿について

野田市の神輿で特筆したいのは、江戸川沿岸地区が所蔵する船神輿である。今上地区は江戸川開鑿後から船運に強く関わってきた歴史があり、江戸後期には醤油運送に関わる河岸や渡し場で繁栄した地域である。五地区（上組・中組・下組・上谷・下谷）が全て夏には大杉祭を行なうが、江戸川に面した上組・中組・下組の三地区が夫々所蔵する神輿は屋形船型の神輿である。子供神輿を入れると六艘ほどあり、他に中組は大型船神輿を野田市郷土博物館に寄贈しており、これを加えると七艘となる。

隣接する中野台上河岸地区・稻荷神社の水神宮にも船神輿が所蔵され、中野台鹿島神社の大杉祭には鹿島神社まで渡御が行なわれている。又、今上下組に接する流山市深井新田・六所神社も大正一二年（一九二三）製造の船神輿があり、この周辺だけでは總数一一艘の船神輿が見られる稀有な地域となつてゐる。造立の経緯や詳細などは不明であるが、いずれも近代に入つてからの製造のようである。

今上下河岸で栄えた上組・稻荷神社が所蔵する船神輿は金具や錆で装飾が施され細工が特に素晴らしいが、制作時期や手掛けた職人について知る人はいない。当地で江戸期より廻船問屋を営み、現在は建物が国の登録有形文化財となつてゐる舛田家を守る舛田氏のお話では、終戦前後までは七月の祭りになると、船頭や若い衆がこの船神輿を担いで江戸川に入り、川の中を上

り下りして禊をしていたという。

船神輿は重量があり担ぐのに六〇人余りの人員が必要な為、今年は下組所蔵の子型神輿を子供達が担いだ以外は、いずれも倉から出して神社前に飾るのみとなつていた。



(3) 天狗人形について  
利根川沿岸の船形・目吹・木野崎・大殿井の四地区には「お姿」「天狗様」と呼ばれる天狗（一三〇cm位）の人形が六体保存されている。天狗の頭部や手足は木製、胴体は張子状となつておらず、直衣などの着物姿の本格的な職人による制作である。大杉祭が最も華やかであった頃に神輿と共に村を担いで回っていたもので、高齢者には強い印象が残されているものの、現在は本来の目的に使われることはなく、所蔵していることを忘却している地区もあつた。いずれにしても、地域の大杉信仰が生み出した貴重な工芸品の一つである。

### ① 船形下・大杉神社の天狗人形



船形下地区の大杉神社は今泉不動尊境内にあり、コンパクトなお堂であるが内部には主尊の大杉大明神石塔をはじめ、古神

輿・向い天狗面額・ヤツデ型石額など多彩な大杉関連の奉納物が安置されている。現在の自治会館が寮と呼ばれる宗教施設の頃には、茅葺屋根の大きな建物であつたといふ。

「お姿」と呼ばれる天狗人形はこの堂内の中央に安置されおり、昔の大杉祭では山車に乗せて回つたものだと云う。当人形は小袴に陣羽織姿だが、布の劣化が激しいため、二九年度には修復が予定されている。事前に行なわれた業者による調査時に胴体より、明治一九年に衣服を修復した旨の紙札が発見され、人形本体は江戸末期頃に制作された可能性もあり、修復過程で製造年の判明が期待される。

### ② 木野崎三地区の天狗人形

木野崎地区の本郷・新町・下町の三集落に天狗人形が所蔵されている。大杉神社の象徴である赤色の鼻高天狗で頭部・手足は木造で内部は張子となつてている。着物は直衣に袴姿で刀とヤツデの团扇を持っている。写真のように行列の時には棒を差し込んで空を飛ぶイメージで進んだようだ。新町・下町とも衣服を修復した形跡があるが制作日や制作者の記述が見当たらぬい。いずれにしても、船形・大杉神社の人形より制作時期は遅いと考えられ、東京・浅草あたりの業者による制作ではないかと地元の方はいう。

調査の際に、大行列などで先頭を飾る毛槍の頭部や、ヤツ

デの葉をデザインした大きな纏の飾りも確認しており、かつての大杉祭がいかに豪華なものであったかを想像させる。本郷地区の人形は未確認だが、以前は船運関係者の家に祀られていたもので天狗の座像である。

全ての調査は今後のこととなる。

### ③ 本宮大杉神社宮司の証言

本宮大杉神社で宮司を務める市川久仁守氏によれば、かつて当社では、村々から天狗人形を所望されると、江戸・浅草の出入り職人に制作させ、完成した人形に御靈入れを行なつた上で制作年と作者名を記した「送り箱」に入れて依頼者に届けていたものだという。人形を制作していた時期は享保から天保年間と思われ、現在も人形が残っているのは野田市だけではないことである。



3. 野田市の 大杉塔

野田市内の 大杉塔は、享保一年（一七二六）より昭和三七年（一九六二）の間に二七基を確認している（表2）。祀られて いる場所の殆どは江戸川・利根川沿岸地域の鎮守神社境内で、船頭など船運に従事する村民が多くつたことから航行安全の祈願を主願として勧請されたものと考えられる。市内の 大杉塔の造塔が増すのは県内の 造立推移（図1）のグラフと同様で江



(2) 引付講中の造立した塔

木間ヶ瀬地区の北部七集落が奉ずる鎮守・白山神社の社殿後方に、庚申塔を始め数基の石塔が並んで祀られている。その中

戸後期に入つてからの塔が多い。

### （1）初出の大杉塔

野田市で初の大杉塔は中里・愛宕神社に祀られている享保一年四月に造立されたシンプルな石祠型の大杉大明神宮である。中里地区には外に三社権現社（文政六）と羽黒神社（天明二）とで合わせて三基の大杉塔が造立されている。

中里・愛宕神社の造塔から五ヶ月後の享保一年九月に、岩名・香取神社に別当光明院が関わり、村の氏子である戸辺一族六名が願主となり大杉塔が造立されている。石祠としては大振りで屋根部分の凝ったデザインや縁に唐草模様（杉ノ葉カ）が彫り込まれるなど造立者達の篤い信仰心が伝わる塔である。願主六名が船運関係者とは断定出来ないが、江戸川開鑿（慶安期）より渡船場や河岸が開設されている地区である。

阿波の大杉大明神は、享保一〇年に下総国香取郡付近の村から踊りと「アンバ大杉大明神、悪魔払つてヨーイヤサ」などの御囃子と共に房総全域に御靈を村次ぎするという流行神の様相を見せ始める。中里・岩名の大杉塔はその最中に造立されたものである。野田地方に大杉大明神が村次されたという記録はまだ出てきていらないが、いずれにせよ市内における大杉信仰の痕跡は享保一年に造立された一基の大杉塔が始まるとなる。



に天保六年（一八三五）二月に造立された大杉塔がある。その造立講中名が「上組引付講中／五十三人」とあり、今となつては地元の方々も首を傾げるのではないかと思われる講名が刻まれている。「引付講中」とは臨時の舟人足のことで、夏や冬の渦水期に川の水位が下がつて航行が困難となつた高瀬船をロープで引き上げるなどして手助けをする仕事であつた。関宿河岸まで船を引いて行き、帰りは下りの船に乗せてもらつて帰つたと伝わる。当村ではこのような形で川に関わる人々が大勢いたということである。

### （3）月参講中による大杉塔

中根・鹿島神社と大殿井・香取神社の大杉塔は「月参講中」によつて造立されている。期限を決めて毎月代参者が大杉神社にお参りを重ね、満願成就の後に石塔を造立するものである。この二地区は内陸で船運とは関りが無さそうだが、利根川から陸揚げした物資を今上河岸まで陸送する街道沿いの地区であり、無縁だつたとも言い難い。二地区とも現在も大杉祭りは熱心に行なつてゐる。

## 三、大杉関連文書について

市内の大杉信仰の流れが見えるものとして大杉塔二七基の情報は大きいが、その他に文字記録として市内に残る古文書を探査してみた。江戸期のものは殆ど掴めず、江戸川水運の船問屋を営んでいた東金野井・遠藤大治郎家の文書の中に明治期の大杉講代参帳などが発見できた。このように民間信仰関連の記録が保存されている例は少なく貴重である。

### 1. 岩本治平家文書「覚—寄進金受取に付」文化一二年

文化一二年四月に阿波大杉社より木間ヶ瀬村名主・岩本治平宛に出された「覚」があり、市内に残る大杉信仰文書としては

最古のものである。木間ヶ瀬村は小字が一八ほどある大村で利根川べりに船運に従事する村民も多い地域であつた。書状は木間ヶ瀬村中として壱両、名主・岩本治平個人として武朱を寄進したことへの阿波大杉社からの受取り証文である。大正三年に地元阿波の富沢清堂氏がまとめた『大杉神社文書録・下之巻』には、「文化一二年に大杉殿御遷座」との記述があり、遷座に関する祝金だろうか。

### 2. 木札「奉再興大杉大明神宮殿宇」瀬戸八坂神社 嘉永二年

瀬戸八坂神社社殿の壁面に嘉永二年（一八四九）に奉納された木札が打付けである。銘文は「奉再興大杉大明神宮殿宇／天下泰平・口中安全／瀬戸村・若者中／嘉永二酉歳九月参拝」とあり、嘉永期に境内社の大杉殿を若者グループが中心となり建替え、九月に参詣も行なつたという内容である。

利根川べりの瀬戸村は、対岸に鬼怒川が流入する合流点があり、江戸期には奥州物資を扱う河岸場であつたことから大杉大明神は航行安全の神として篤い信仰があつたことは推察できる。寛政六年（一七九四）造立の大杉塔もある。

### 3. 遠藤大治郎家文書「大杉代参講連名簿外七通」明治期

東金野井村の名主を永く務めた遠藤大治郎家は江戸川沿岸で安永期より河岸問屋を営んでおり、明治期の船持関係者の記録が多数残されている。主に川船運搬仲間の組織である「船玉講」関連記録であるが、その中に船玉講とは別メンバーの大杉代参講の控帳や大杉講開催の廻文などが七本保存されている。大杉代参講連名簿の記載は明治一八年から始まり一七年後の明治三五年で終わっている。これは地元である東金井を中心とし江戸川筋の東金野井・尾崎地区を中心に中里・岡田・岩名・今上・座生・中野台の八地区に居住する船持衆で結成した大杉講のようで、決められた二人の代参人が大杉神社でお札を購入

した際の受取りが神社により記された控帳である。代参の記載は明治三五年で終っているが、講開催の回文などから東金野井と尾崎の二地区に収斂しつつも、講は明治末までは継続されたと推察される。

#### 4. 遠藤正幸家文書「今宮神社祭典大芝居諸掛控」明治期

遠藤正幸家は東金野井前在家地区に中世以来居住し、地域で数々の役職を果してきた旧家である。

当家の所有する文書中に、明治三九年四月三日に遠藤定三郎氏により作成された「今宮神社祭典大芝居諸掛控」が残されている。本来、今宮大杉神社の祭礼は七月であるが、この年は四月に市川福次郎一座に三六円五〇銭を支払い、芝居興行を買っている。この時期に祭典が行なわれた理由は、前年の明治三八年に日露戦争に勝利したことの祝典を兼ねていて、支出項目には凱旋紀念盃を軍人用に誂えて贈ったことも記されている。今宮大杉神社祭典名目で凱旋祝賀会を行なっていることに注目したい。

#### おわりにかえてー庄内領について

二年がかりで野田市の大杉信仰を追つたが、追うほどに増える調査対象に音を上げそうになつた。なぜ、野田市にこれほどの大杉信仰が定着していったのか。先にも少し触れたが、野田市域と云つても大杉信仰が盛んだつた地域は木間ヶ瀬地区以南のかつて庄内領とよばれた地域に限られる。

「領」とは中世期（後北条氏）の支配域であつた枠組みを江戸幕府が継承・再編したもので、低地における防水・水利を共にする組合活動を主目的とした括りであつたが、それに付随して職業組合や触次組合が結成され、自主的に運営された。埼玉県東部の低地地域にも多くの領が存在したが、野田市南部と江

戸川西岸の旧庄和町にも庄内領と言う領が存在したのである。その証左として、この区域に立つ多くの供養塔には「下總国葛飾郡庄内領」の銘が刻まれている。永年、野田市内の石仏調査を行つてきいたが、周辺地域とは量も種類も群を抜いており、近世の庄内領の繁栄ぶりには目を見張るものがあつた。大杉信仰もその一端であることは間違いないだろう。

筆者の調査時に事前調査で多大なご協力いただいた瀬能建夫氏、ビデオ撮影を担当して頂いた染谷啓之・元子夫妻、お忙しい中、私達の無理なお願いに協力していただいた各地区の役員の皆様方に心からお礼申し上げます。

#### 【参考資料】

- 大島建彦『アンバ大杉信仰』岩田書院 一九九八年  
大島建彦『アンバ大杉の祭り』岩田書院 二〇〇五年  
大島建彦「利根川流域とアンバ信仰」『研究報告12号』  
千葉県立関宿城博物館 二〇〇八年  
宮沢静堂編『大杉神社文書録』私家版 一九一四年  
千葉県立関宿城博物館『天狗への祈り』 二〇〇七年  
野田市史編さん委員会『野田市民俗報告書(1)~(9)号』  
一九九五~二〇一五年
- 野田市史編さん委員会『野田市宗教施設総覧』一九六九年  
野田市史編さん委員会『野田市金石調査資料集』一九六七年  
野田市史編さん委員会『東金野井・遠藤正幸家文書』二〇〇五年  
野田市史編さん委員会『東金野井・遠藤大治郎家文書』二〇〇五年  
近江礼子「我孫子市におけるアンバ信仰」『市民による我孫子市研究』  
一研究センターアイロ周年記念誌』二〇一五年  
宮田 登『近世の流行神』評論社 一九七二年

表1. 下総地方の大杉塔造立順 (117基中)

No.	所在地	種類	形式	造立年	西暦	銘文
1	白井市平塚 鳥見神社	大杉塔	石祠	宝永六己丑十一月吉日	1709	大杉大明神/平塚村信心立氏子山澤金拾郎/敬白
2	我孫子市中條 龍泉寺	大杉塔	石祠	正徳元辛卯天九月廿四日	1711	大杉大明神/清海行人
3	野田市岩名 香取神社	大杉塔	石祠	享保十一年九月□□日	1726	大杉大明神宮/岩名村 戸邊六名 別当光明院
4	野田市中里 愛宕神社	大杉塔	石祠	享保十一年四月吉日	1726	大杉大明神宮/下総国葛飾郡庄内領中里村
5	鉢子市富川 大杉神社	大杉塔	石祠	享保十九年	1734	大杉大明神/願主 留河村
6	野田市木野崎 香取神社	大杉塔	石祠	元文二巳天九月日	1737	大杉大明神/木之崎本郷講中
7	野田市木間ヶ瀬出洲 水神社	大杉塔	石祠	元文五年十月吉日	1740	大杉大明神・水神塔
8	野田市木間ヶ瀬下根 個人	大杉塔	石祠	寛保二年十二月	1742	大杉大明神/逆井佐治右衛門
9	船橋市古和釜 八王子神社	大杉塔	石祠	寛保二年二月吉日	1742	大杉大明神/古和釜村/東光寺
10	匝瑳市富岡 稲生神社	大杉塔	石祠	寛保三年亥正月吉日	1743	大杉大明神/当村中 人名(4)

表2. 野田市の大杉塔一覧 (今宮塔合)

No.	所在地	種類	形式	造立年	西暦	銘文
1	中里 愛宕神社	大杉塔	石祠 杉葉模様	享保十一年四月吉日	1726	大杉大明神宮 下総国葛飾郡庄内領中里村
2	岩名 香取神社	大杉塔	石祠 筒型欠損	享保十一年九月□□日	1726	大杉大明神宮 岩名村 戸邊六名 別当光明院
3	木野崎本郷 香取神社	大杉塔	石祠 石祠	元文二巳天九月日	1737	カーン 大杉大明神 木野崎本郷中
4	木間ヶ瀬出洲 水神社	大杉・水神塔	石祠	元文五年十月吉日	1740	大杉大明神/水神宮
5	木間ヶ瀬下根 逆井家	大杉塔	石祠	寛保二年十二月	1742	逆井佐治右衛門
6	吉春 菅原神社	大杉塔	石祠	明和九年壬辰七月吉日	1772	カーン 大杉大明神 別当成就院 吉春村中 人名(4)
7	中根 鹿鳴神社	大杉塔	石祠	安永九子四月吉日	1780	カーン 大杉大明神 中根新田月参講中 願主(1)
8	中里阿部 羽黒神社	大杉塔	石祠	天明二壬寅六月吉日	1782	大杉大明神 中里村新田講中 別当妙樂院
9	東金野井 天神社	大杉塔	石祠 筒型欠損	天明五乙未九月吉日	1785	大杉大明神 下総国葛飾郡東金野井村 惣邑講中
10	船形谷津野 不動堂	大杉塔	笠付角塔	江戸中期		大杉大明神(大杉堂御神体)
11	瀬戸 八坂神社	大杉塔	石祠	寛政六年甲寅十一月吉日	1794	大杉大明神 世戸中
12	船形 八幡神社	大杉塔	石祠 前面剥落	寛政八年正月吉日	1796	大杉大明神 稲荷大明神 人名(3)
13	山崎中地 踏切付近	大杉塔	石祠	享和元辛酉年十一月吉日	1801	大杉大明神
14	小山 稲荷神社	大杉塔	石祠	享和二壬戌歳六月吉日	1802	大杉大明神 下総国猿島郡小山新田講中
15	大殿井 香取神社	大杉塔	石祠	享和三亥歳十月吉日	1803	大杉大明神 大殿井村月参講中 世話人(3)
16	中里 三社権現	大杉塔	麥角柱型 杉葉	文政六年癸未八月良辰	1823	カーン 大杉大明神 大天狗 小天狗 願主(1)
17	鶴奉 稲荷神社	大杉塔	石祠	文政八年二月吉日	1825	大杉大權現 金毘羅大權現 古谷岩藏
18	木間ヶ瀬出洲 白山神社	大杉塔	石祠	天保六年二月吉日	1835	大杉大明神 上組引附講中 五十三人
19	谷津 香取神社	大杉塔	石祠	万延二酉二月吉日	1861	大杉大明神 谷津村中
20	古布内高倉 石宮橋脇	大杉塔	石祠	慶應元丑年十一月吉日	1865	大杉大明神 高倉坪中
21	五木 香取神社	大杉塔	自然石碑 ヤツヅ葉	江戸後期	1866	大杉大明神 大天狗 小天狗・ヤツヅの葉 線影
22	船形下 大杉・水神社	大杉塔	石祠		1867	大杉大明神
23	新田戸 八幡神社	大杉塔	石祠	明治二十一年旧八月二十五日	1888	大杉神社 新田戸氏子 再建
24	桜台 桜木神社	大杉塔	石祠 半壊	明治三十二年十二月□□日	1899	大杉神社 再建/劣化で文字なし
25	江戸町 香取神社	大杉塔	自然石碑	明治期	1911	大杉大明神/
26	船形 熊野神社	大杉塔	角塔	昭和三十年十一月良日	1955	今宮大神 川間村船形 □□者 人名(3)
27	花井 神明神社	大杉塔	駒型	昭和三十七年二月吉日	1962	大杉神社 氏子中

表3. 野田市大杉神社一覧

所在地	大杉鎮座地	主尊	名称	講 △	工芸品・什器等	△…現在なし	開運行事ほか
							△
1 関宿江戸町	香取神社 境内社	石祠	大杉大神	△			大正期まで船頭の大杉講があった
2 関宿江戸町	八幡神社 境内社	合祀	アンバ稻荷	△			初午に「阿波稻荷大明神」幟旗を立てる
3 新田戸	八幡神社 境内社	石祠	大杉神社	△			明治21年に石塔を再建
4 古布内表・新敷				△			昭和期まで大杉講あり
5 古布内高倉			古布内高倉	△			大杉堂の神輿を子供達が八幡神社まで渡御
6 木間ヶ瀬高倉	大杉堂(No.5と共に)	神輿／石祠	大杉大明神	○			3月3日 杵天回し(お札配り・直会)
7 木間ヶ瀬武者土	大杉神社	神輿	大杉神社	○			武者土離子(無形文化財)／弘化3年講始まる
8 木間ヶ瀬飯塚	白山神社	石祠	大杉大明神	△			石祠は地元引付衆(船を引張る)が造立
9 木間ヶ瀬松ノ木	天満宮	神輿／子供	大杉大明神	○			木間ヶ瀬講中が文化7年間に1回2朱寄進
10 木間ヶ瀬志部前堀	駒形神社 境内社	神輿	大杉大神	○	村中寄進文書 寄付連名額		昭和50年に大杉殿新築／寄付連名(板)
11 木間ヶ瀬内野	神明神社	出洲区共同	△				出洲地区共同
12 木間ヶ瀬出洲／内野	水神社社殿内	神輿・石祠	△				3月 大杉様燈籠
13 木間ヶ瀬砂南	稻荷神社 境内社	神輿	△				
14 木間ヶ瀬向ノ内	鹿嶋神社社殿内	神輿	△				
15 木間ヶ瀬下根	本明院本堂内	神輿	△				
16 東宝珠花	日枝神社 境内社	神輿	△				
17 平井	香取神社 境内社	神輿	△				
18 磯田	香取今宮神社	神輿	△				
19 中里	三社権現	石祠	△				
20 中里阿部	羽黒神社 境内社	神輿・石祠	△				
21 小山	稻荷神社 境内社	神輿	△				
22 船形宮前	香取神社 境内社	神輿	△				
23 船形明光地	大杉殿	△					
24 船形島新田	水神・大杉神社	神輿・石祠	△				
25 船形谷津野	泉不動尊 境内社	神輿	△				
26 船形榎台	熊野神社 境内社	石祠	△				
27 蓬打	大杉神社	神輿／古	△				
28 目吹上高根	香取神社 境内社	神輿	△				
29 目吹城宿	熊野神社 境内社	神輿	△				
30 目吹下夕村	香取神社 境内社	神輿	△				
31 目吹二ツ塚	大杉神社	神面・幣束	△				
32 木野崎本郷	大杉神社	神面	△				
33 木野崎新町	大杉神社	神輿	△				
34 木野崎下町	神明神社社殿内	神輿	△				
35 木野崎高根	稻荷神社社殿内	神輿	△				
36 潬戸	八坂神社 境内社	神輿・石祠	△				
37 三ツ堀	香取神社 境内社	神輿	△				
38 保木間	天神社社殿併設	神輿	○				
		神輿新造記念碑	○				

39	上三ヶ尾	大杉神社	神輿	大杉神社	○	
40	下三ヶ尾	香取駒形神社境内社	神輿	大鉢	○	
41	西三ヶ尾	香取神社 境内社	神輿	大杉神社	○	
42	東金野井	天満宮 境内社	神輿・石祠	大杉大明神	○	天狗面 船持衆による明治期の代参帳あり
43	尾崎	香取神社 境内社	神輿	神輿庫	○	
44	蕃昌	秋葉神社 境内社	神輿	大杉神社	○	
45	岩名	香取神社 境内社	神輿・石祠	大杉大明神	○	享保期の大杉塔 江戸期の社額「大杉大明神」あり
46	五木	谷津自治会館	神輿	大杉殿	○	平成27年、香取神社向いに神社新設
47	谷津	谷吉神社 境内社	神輿	神輿庫	○	
48	谷吉	菅原神社 境内社	神輿・石祠	大杉大明神	○	
49	吉春	稻荷神社 境内社	神輿	大杉神社	○	旧成就院より移転
50	今上上	中組自治会館内	神輿	大杉神社	○	明治21年社殿新築。平成13年再建。
51	今上中	大杉神社	神面・幣束	大杉神社	○	鳥天狗面を持って配札回り
52	今上下	下組自治会館内	神輿	大杉神社	○	中組八幡神社より大正15年当地に移転
53	今上下	女体神社殿	神輿	大杉神社	○	大神輿1・子供神輿1・幼児神輿2
54	今上上谷	鹿島神社 境内社	別に神輿倉	大杉神社	○	新殿新築建立記念碑 昭和59年・大杉殿新築
55	今上下谷	堤台	大杉神社	大杉神社	○	
56	中野台	清水	八幡神社 境内社	注連縄	○	ノッハバカ獅子舞(県無形文化財)
57			愛宕神社 境内社	今宮神社	○	文政12年に大杉神社勧請
58			香取神社 境内社	大杉神社	○	
59	野田上町	上花輪	神輿	大杉神社	△	明治15年に風害で破損後、再建
60	上花輪太子堂	中根	神明神社 境内社	大杉神社	○	
61		桜台	鹿島神社 境内社	大杉神社	○	
62			桜木神社 境内社	大杉神社	○	波風造 木造瓦鉛板葺 1坪余 7×6尺
63	山崎	東新田自治会館	石祠	大杉神社	○	自治会館の敷地内に神輿庫
64		里自治会館	神輿	大杉神社	○	自治会館の敷地内に神輿庫
65	山崎	大和田自治会館	神輿	大杉神社	○	自治会館の敷地内に神輿庫
66		中地 集会所	石祠	大杉大明神	△	旧熊野神社に境内社があった
67	山崎	大殿井	香取神社 境内社	天狗人形		昭和59年神輿修復。幟旗に「疫病平癒」
68		堤根	菅原神社 境内社	大杉神社	○	
69		花井	神明神社 境内社	大杉神社	○	
70	柳沢	鶴奉	稻荷神社 境内社	大杉神社	○	近年、神輿殿建替 昭和35年伊勢講碑に大杉堂改築併刻
71		宮崎	神明神社 境内社	大杉神社	○	古神輿と新神輿／昭和33年大杉社新築
72						
73						

建替え、合祀(大正13年)まで存在した神社

74	山崎 北新田	旧稻荷神社 境内社	今宮神社	大正13年合祀	明治12年 間口4尺 輿行1間
75	山崎 上里	旧八幡神社 境内社	今宮神社	大正13年合祀	間口4尺 輿行1間